

水俣の問いと可能性 ——「水俣学」への構想力を求めて——

本号に掲載するのは、1999年2月27日、熊本学園大学社会関係学会・熊本学園大学附属社会福祉研究所共催で熊本学園大学図書館 AV ホールで開催されたシンポジウムの記録である。シンポジウムは、本特集のタイトルにもあるように「水俣の問いと可能性——『水俣学』への構想力を求めて——」と題された。

本シンポジウムを組織するに至る経過や問題意識は本文中にも述べられているが、原田正純教授（当時熊本大学医学部助教授）の熊本学園大学就任の機会に「水俣学」を構想していこうという共通の問題意識が出発点である。呼びかけのチラシには「水俣病事件をたんなる『教訓』とするのではなく、総合的な地域研究の新たな出発点と位置づけ、その可能性を模索する」と記したが、本シンポジウム記録をお読みいただければ分かるように、たんなる地域研究をはるかに越えて、学問研究のスタイルやあり方を含めて新たな学としての水俣学を生み出そうということが確認されたように思われる。

なお、その後、熊本学園大学の研究者を中心に原田正純教授を座長とする水俣学研究プロジェクト「和解後の水俣地域市民社会再生に関する総合的研究—水俣学の確立にむけて」が発足し、学際的な研究が開始された。

本稿は、当日の録音記録に基づき、大住和子さんが整理編集し、パネラーの方それぞれに手を入れていただいたものである。シンポジウムの開催にあたって、ご多忙の中参加いただいたパネラーおよびシンポジウム参加者ならびに会場設営など裏方でご協力いただいた熊本学園大学事務局とくに図書館に感謝の意を記しておきたい。

パネリスト：原 田 正 純
 富 樫 貞 夫
 羽 江 忠 彦
司 会：花 田 昌 宣

<司会>

今日は「水俣の問いと可能性—『水俣学』への構想力を求めて」というテーマで、熊本学園大学の社会福祉研究所と学内の教員でつくっております社会関係学会の共催でシンポジウムを行います。私は司会進行をいたします花田です。

最初に、今日ご登場いただくパネラーの方々の紹介をさせていただきます。まず、現在は熊本大学医学部助教授の原田正純先生です。原田先生は本年の4月1日から、熊本学園大学社会福祉学部へ赴任なさいます。続きまして熊本大学法学部の富樫貞夫先生（現在、志学館大学法学部教授）です。そして熊本学園大学商学部で社会学を専攻されております羽江忠彦先生です。それぞれ医学・法学・社会学の観点から、本日の話を進めていただきたいと思います。

今日のシンポジウムは、原田先生が本学へ赴任されるにあたりまして、水俣学というものを考えてみたいということでしたので、そのことを一緒に考えて行く場をつくる皮切りのブレインストーミングをしようということが始まりでした。今日それぞれの先生方から提起されるかと思いますが、これから作っていく学問で、いわば学の対象、担う主体、あり方、そして場の一つ一つが問われていくものであらうと思います。

水俣病事件の検証にあたって

水俣病事件は、水俣病患者の公式発見（1956年）から長い歴史をもっております。その中には様々な研究者、学者の関わり、あるいは社会運動の拡がり等々があり、そして数年前かつつき解決が図られたというふうに言われました。そのことの意味を改めて検証する必要があるかと思っています。実は水

俣病にどのような意味であれ関わる研究者あるいは学者は、その事件の重さと被害者の運動に、いい意味でも悪い意味でもとらわれていたのではないかという気が私はいたします。水俣病事件は解決したのではなく、認定問題に関してある種の解決策なるものが図られたに過ぎないのですけれども、このことをもって水俣病の裁判は、関西におけるものを除いて全て和解で終了いたしました。そういう意味では、研究者も改めて水俣病事件というのを見ることができだろうし、新しい時代を作っていかなければならないと思います。

それを学園大学で行うということについて一言述べさせていただきたいと思います。名称が熊本商大から学園大学となって5年経ちますが、水俣病の様々な歴史の中で、本学がいかなる役割を果たしてきたのかと考えますと、いい意味でも悪い意味でも極めて役割は小さかったのではないかと思います。

本学の社会福祉研究所は1966年にでき、研究所報を年に1冊ないし2冊出し続けているのですけれども、この30年に及ぶ歴史の中で水俣病にふれた論文というのはわずかに2本だけです。そういう意味では、熊本大学の、とりわけ医学部の研究者たちの否が応でも立ち向かわざるを得なかった状況に比べて、熊本商大の研究者たちは、個人的には訴訟の支援ということで署名などの行動はしたかもしれないけれども、研究者として関わった人は極めて少ない、ほぼ皆無であろうというふうに考えます。ここから目と鼻の先のところで、2千人3千人の人が亡くなられ、10万20万を越える被害者が出ているというのに対して、あまりにも鈍感であったのではないかという痛苦的反省の上に物事を考えていきたいというのが、私の個人的な思いも含めての出発点であります。このようなものも含めまして、「水俣学」を考えるということに進めさせていただきます。

それでははじめに原田正純先生にお願い致します。

学園大学を水俣学の拠点に

<原田>

水俣学というのは最近私が言い出したわけではなくて、たとえば富樫先生たちは水俣病研究会というのを古くから作っておられるし、それから私自身もいろんなところで、いろんなグループ、いろんな分野の人たちと水俣について共同研究をしたりあるいは話し合っただけで批判をしあったりしているわけです。私が言い出したというよりもむしろネーミングが良かったのだなと思います。それはさっき花田さんもおっしゃったように、解決とは私も思いませんが、一応水俣病問題の一つの区切りがきたということは間違いないわけです。そこで、水俣病問題を今後、どう新しく展開していくかという時に地元の学園大が受け止めて、このような機会をもってくださったということに感謝しております。

私はこの40年、本当に水俣にどっぷりつかってきました。つまりすぎて見えなくなった部分もたくさんあるだろうと思うのです。そういう意味で新しい目で見ると作業が、私の最後の水俣に対する仕事だと思っています。足尾鉍毒事件は100年以上経つわけですが、今でも多くの研究者たちが、足尾鉍毒事件についての研究書を出しておられて、日本の近代化に光を当てておられるわけですから、水俣病事件の研究だってあと100年したって終わらないはず。とくに近代日本の歴史の中でも、戦後の高度経済成長の中でも、水俣病事件というのは研究し尽くされないものが残っていくはず。それで、そういった研究のための拠点がどこかに欲しかったのです。そういうのは国立の水俣病研究センター、あるいは国立大学の中に置くのが本当なのかも知れませんが、現在の機構では困難ですし、国も加害者ですから、あまりそういうことはしたがりません。

今日は、最初に医学の立場からお話することになっていましたが、実は2月18日に川本輝夫さんが亡くなりましたので、彼の話から始めたいと思います。彼の死は、本当に残念です。

川本輝夫さんのこと

川本さんと私がいつ出会ったのか、あまり記憶は、はっきりしていません。私は昭和 35 年 (1960) 頃から水俣に通っていましたが、その頃はまだ出会ってはいません。1969 年 6 月 14 日に水俣病第一次裁判が起こって、裁判の原告団の人たちとはかなり接触していましたから、その前後だったのではないかと思います。この人の役割というのは水俣病事件史の中で、ものすごく大きいのです。川本さんはある意味では素人ということになっています。本当は水俣病に関しては素人ではないのですけど、川本さんの素人のもつ非常に素朴な、しかし本質的な問いかけが、権威だとか、専門家といわれるような人たちがもっている既成の概念（枠組み）を本当に突き破ったのです。権力だとか権威というものの壁はものすごく厚いのですけれども、それに風穴を開けたというのはすごいことだと思います。そういった権威主義、既存の概念にしばられているということは決して官僚だとか学者というような特別な者だけではなく、私たち自身にもあるものだということを鋭く突きつけられたのです。

素朴な問いかけが目からうろこを

例えば、ある患者を私は脳梗塞だと診断しました。理由は半身麻痺があったからです。私は「川本くん、水銀は身体の片方だけに入っていかなばい」と言いました。「水銀は両方に入っていくけん片方だけ麻痺がきてるのは、それはあんた脳梗塞たい」と言ったら、彼が「じゃあ先生、脳梗塞の人が水銀の入った魚を食べたらどうなりますか」と聞くわけです。その質問はものすごくショックでしたね、この一言は。

このことは実は私たちが学んできた医学の診断学をひっくりかえしてしまう程のことなのです。私たちは顕在するいくつかの症状をつかまえて、そこからいくつかの病気を想定して、選別していくようにと習ってきました。それを鑑別診断と言います。脳梗塞の人が水銀を食ったらどうなるかという質問は水俣病の本質をついていたのです。つまり環境が汚染されると、もとも

と病気をもった人も、それから病気をもっていない人も、お腹の中の赤ちゃんから老人まで、みんな汚染されてしまっている。それが水俣病であることをうっかり忘れてしまうわけですよ。それで専門家面して、「いや脳梗塞だから水俣病ではない」と診断したことに対して、それでは「脳梗塞の人が水銀食ったらどうなるか」と言われたときには愕然としてしまいました。

他にもこんなことがありました。「先生たちは昭和35年（1960）に水俣病は終わったというけど、どういう根拠ですか。どういう根拠で医学者たちは35年に水俣病は終わったとするのですか」と言うのです。「それは、もう患者が出なくなったからたい」「それをどうやって調べたのですか」「いや調べてはいないけれども、届けが出ていませんよ」。だけど考えてみると、本当に水俣病が終わったとするなら、その根拠は、まず魚に含まれる水銀値が下がるか、あるいは工場が排水にもう水銀を出さなくなるかが一つの条件ですよな。「もう水銀は流してはいないでしょ」「いや昭和40年（1965）まで流れとるでしょ、水銀値は高かったとですよ」「それならみんなが魚を食べなくなって…」「いやみんなまだ食べてますよ」では一体、何を根拠に35年に水俣病は終わったというのかと突き詰められると、根拠になるものが何にもないことに気付いたわけですよ。そういう形で私たちがもっていた水俣病に対する概念（枠組み）を彼はその質問で取っ払っていったのです。考えてみれば私は彼のそういう質問にどうやって応えようかと悩みながら私自身の中にある水俣病の概念を変えていったと思うのですね。最初はこん畜生と思ったけれど、これはとてもありがたいことでした。そのことに心から感謝しています。

私たちだけではないかもしれない、医学の分野だけではないかもしれないけど、いろいろな専門家といわれる人たちが自分の枠組み、自分の学問の中で安穩していると、見えなくなってしまう。そんなときに川本さんみたいな、いわゆる専門家以外の「素人」からドサッと問題を突きつけられることは非常にありがたいことと感謝しなくてはならないことです。また別のこともそれと同じような経験をしました。

水俣病研究会でも鍛えられる

ここに富樫先生がおみえですけど、富樫先生も憎たらしかった一人ですね。最初に裁判が始まって、その応援をしてくれと言われて、目をつぶったら顔が浮かぶ患者さんたちが原告ですから、それはもう絶対お手伝いしますよ。そうして参加したのですけれども、この研究会が厳しかったのです。眠らせてないのでからね。「水俣病の定義を言え」と富樫さんたちに言われて、あれこれ答えたら、「書くように」っていうでしょ、ところがいざ書こうとすると書けないんですよ。それでも一生懸命書いていったら、みんなで寄ってたかって批判され、問題点を指摘されて文章はずたずたにされて、まだこんなのではだめといわれて、専門家のつもりでいたのに結局何も分かってなかったことが分かったのです。

例えば水俣病は、さっきの川本さんの質問ではないですけども、28年から35年の間に発病して、患者が121人で、そして症状は視野狭窄、感覚障害、運動失調、言語障害、聴力障害などだ。これが水俣病だ。と言って持っていったって、「そんなものではだめだ、そんなものはただ水俣病審査協議会という認定審査会がそう決めただけではないか。全貌はどうなっているのか」。そんなこと言われたってと思いました。私もそれまでに共同研究などの経験がなかったわけではありませんが、これはもう共同研究というよりも喧嘩ですよ。どんどん議論して批判して。でも私はその川本さんの話だとか、富樫さんたちの研究会に参加するということで、目からうろこが落ちる思いでしたね。それまでと見方が変わりました。そして改めて見てみますと、医学の持つ浅さというか、哲学の無さを痛感しました。

データの積み上げで、次世代に教訓を

もちろん医学者の中には立派な哲学をもった方もたくさんいらっしゃいます。最近、白木博次さんという東大名誉教授で、高名な病理学者ですけど、彼が『日本人の脳が危ない』という本を書かれています。その副題は「医の魂を問う」、医学に哲学がないということです。哲学というとおかしいのです

けど、浅さですよ。それは私自身の欠点でもあるわけで、歴史をちゃんと学ぼうとしないとか、全貌をちゃんと分かっているのではないのかということです。私は仲間たちと世界のあちこちで水銀汚染の調査をしていますけれども、これは水俣と違って、どんどん汚染が広がりはじめている、進行中の場所です。そうになると何が水俣病か、最もミニマムな水銀に対する影響は何かという医学的なデータこそが、後に問題が起きたときの有効な、今一番必要な情報ですね。その一番必要な情報をもっているのは実は水俣しかないわけですよ。ところが水俣ではどうかというと、どこまで補償金を払うかという問題にすり替えてしまったのがこの30年です。例えば、今の判断条件でいえば、多数決で多くの人が「水俣病と言っていいだろう」という所で線を引いてきたけれども、そんなこと、アマゾンで世界中の誰が見ても間違いない水俣病だというのが出るまで待つのかという話になるわけです。そんなのが出たときにはもう手遅れであることは水俣が一番よく知っているはずですよ。ところが残念ながら、最もミニマムな微細な影響は調べていません。全く調べてないのです。調べると被害を拡大することになるからでしょう。それから、水俣の現場というのは、これは取り返しのつかないことをしたわけですけども、水俣病事件が起こった以上は、その結果がどうなるかをずっと追跡するのが、まあ大げさに言えば、人類の遺産だと思います。このことは水俣病だけではない。どうも私たちにはそういう考えが足りないような気がしますね。

例えば、ベトナムの枯葉剤の問題を考えてみても、あそこで7200万リットルなんていうとんでもない量の枯葉剤を、200万という人々の頭の上にばらまいたわけですよ。ではこの影響はどうなるのか、将来どうなっていくのかということを実はどこの国も十分に調べてないのです。政治的な理由があったにせよ、調べていない。これは、世界中の医学者、研究者の怠慢というほかはありません。もし、ベトナムで枯葉剤の影響をきちんと調べていたら、今問題になっているダイオキシンの影響については、かなり答えがでていたはずですよ。そういう意味では、全く水俣と同じですよ。

さらに、カネミ油症事件でもそうです。PCBが環境の中で増えてきている。

これが今後人体にどういう影響があるかがアメリカでは大変な問題になっています。ミシガン湖でPCB汚染が進行したと私に手紙で問い合わせて来ます。「PCBのあの事件はその後どうなったか」と。ところが追跡調査が行われていなく、しかも最も軽症、未認定患者については全く資料もないため、現在どうなっているのか分かりません。もっとも、九州大学が血中濃度や皮膚症状については報告していますが、認定された患者に限られているし、全体像が分かりません。これは人類が初めて経験した、いわば負の遺産みたいなものです。起こしてはいけないけれども、起きた以上はそのことを徹底的に追及してデータを残していく。そのことが次の教訓になるというふうに私は思っています。

このように、まだまだ水俣の研究は医学的な点に限ってみても不十分です。さっき申し上げたように、長期にわたってそれを積み上げていく、その教訓を次に生かすという作業がどうも欠けています。これは医学だけではないと思いますけれども、医学の立場からいうと、その作業が残っていると思います。

また、治療という視点が水俣病事件では完全に欠けてしまいました。私自身も反省をしているところがたくさんありますが、裁判が起きますと放っておけず、裁判や未認定患者に関する診断書だけでも何百枚と書きました。言い訳をすれば、私はそっちにエネルギーをほとんど費やしましたので、治療のところまで考えが及ばなかった。こう言ってしまえばそれまでですけど。しかし実際問題として水俣病事件の中で治療という視点が欠けていたのは事実です。

確かに治療という治療はなく、神経細胞が傷害したら元にもどらないという現実があります。しかし、だからこそすることがいっぱいあるわけです。もし簡単に注射を続けて神経細胞が元にもどれば問題はそれで解決するわけです。むしろ治らないからこそ、やらなければならないことが山ほどあり、これも広い意味での治療と言おうと思うわけですが、医療というものを今後ずっと広い意味で追求していかなければならない理由です。医学、治療を狭

くとらえてはならないと思います。

これも川本さんの言葉ですけど、川本さんはもう十何年も前に、「水俣病の最終決着はですね先生、福祉ですよ」と、はっきり言っていました。彼は市議員になりましたが、それも手段の一つではなかったかと、私はひそかに思っています。一度は落ちましたけどね。要するに個々の人に補償金をいくら払うということもありますが、個人的に補償するという問題ではなくて、地域全体で一つの福祉が最終的な水俣の解決に向かうことだろうあと、彼がよく言っていたのを覚えています。つまり、患者の生活支援、崩壊した村の建て直しですね。すごいと思って、私も少し医療に参加しなければとは言いながら、未認定問題の診断書だとか裁判の証人だとか、そんなことでエネルギーを8割くらい費やしてしまった。そこで、これからは医療を視点に入れなければいけないわけです。

そうなった場合に、治療や介護保険もありますけれども、これらは医学が主役であって、他のところは副のように、どうも考えられている。パラ・メディカルなんて言葉はありますけれども、そうじゃない。もうこうなったら、医学も参加するけど、いろいろな分野の学問やさまざまな分野の技術が対等に参加して協同の形で問題を解決していかなければいけない。そういう意味で水俣の医療を今後どうしていくのか、患者たちをどうやっていくのか。それこそ、全く未開拓の分野です。認定されようがされまいが、とにかく汚染された人たちが不知火海沿岸に20万くらいいたわけですから、この地域をどうしていくのかということを探っていかなければならない。その探っていく過程の中で、一つの答えができれば、それは日本の全体の医療だとか福祉だとか、そういう問題につながっていく。言葉は悪いですけども一つの実験場、モデルであるというふうに私は思っているわけです。

そういうタイミングの時に、こういう会ができて、いろいろな研究者が参加をして、議論し、研究を継続していく。さっきから何度も申し上げているように、自分たちの従来の狭い専門領域の中だけではどうしても水が淀んで腐ってしまうという気がします。水俣学なんて偉そうなことを言わなくても、

いろいろな分野の人たちがそこで交流をして、お互いに水俣病事件に映して
みることによって、自分の分野を新しく発見していく、また掘り起こしてい
くという場になったらよいというふうに思っております。このへんで終わり
たいと思います。

<司会>ありがとうございました。では続いて富樫先生お願いします。

自身に問いかける水俣病

<富樫>

私が水俣病問題に関わったきっかけは裁判でございます。1969年6月に訴
訟派といわれた患者たちが水俣病事件では初めてチッソを相手取って損害賠
償請求の裁判を起こしたわけです。これは、1968年9月に遅れに遅れた政府
見解というのが出されまして、水俣病は、当時の言葉で言うと、やっと国の
公害として認定されたわけです。それに勢いを得て患者たちは、当時は患者
団体は『患者家庭互助会』一つしかありませんでしたけれども、改めてチッ
ソに対して補償を要求したわけです。ところが、これは実に屈折した経過を
たどりまして、結局互助会は分裂させられてしまいました。約2/3の患者家
庭の人たちが一任派というグループを作りまして、これは厚生省とチッソに
よって内容的には非常に不十分な和解へと導かれたわけです。それに対して
同意できなかった人たち、そういう道を歩んでいく過程で、もう一度1959年
の見舞金契約の二の舞になるのではないかということを強く懸念した人たちが
裁判を起こしたわけであります。

当時は一任派の患者たちは行政からみてもチッソからみても実に「かわい
い」患者たちであります。それに対して訴訟に踏み切った人たちは、水俣
の地域社会の中では、徹底して非難され孤立させられていました。ですから
この人たちが裁判を起こしたのは、文字通りそこまで追いつめられた結果で
ありまして、いろいろ法律の専門家や弁護士に相談して、裁判を起こせば絶
対に勝てるぞとか、その方が筋の通った解決が得られるということで裁判を

起こしたわけでは、決してなかったのです。とにかく、その選択しかないところまで追いつめられて起こしたのが最初の水俣病の裁判であります。そういう裁判ですからお先真っ暗だったわけです。

裁判は起こしたものの全くどうやっていいのか分からない。果たして裁判に勝てるのかどうかという保障は当時、全くなかったようです。そのような状況の時に、法律の専門家としてぜひサポートして欲しい、支援して欲しいという要請があり、それを受けて関わったのが最初です。

この裁判の一番大きな争点となったのが「チッソの過失」という問題であります。日本の法律ではどんなに人を殺し、あるいは傷つけてもその加害者に過失がなければ損害賠償の義務は負わなくてもいいという原則になっているものですから、チッソ側に過失があったということを裁判で立証しなくてはいけなかったわけですね。ところが当時の法律学の常識からいうとそれは極めて困難なことでした。発想の転換、あるいはパラダイムの転換をしないことにはその壁は乗り越えられないという、そういう大変な問題を実はこの裁判はかかえていたわけです。

30 年に及ぶ研究を支えている患者との出会い

その問題を解決するために、何人かの人たちで『水俣病研究会』を発足させて、新しい理論を展開していきました。幸いにして裁判所もそれを受け入れてくれて、一次訴訟は当初の予想とは反対に完全に勝訴したわけあります。これが私の最初のこの事件との関わりであります。本当ならばこの裁判が終わった 1973 年で私の仕事は終わったはずですが、最初に出会った患者に私は非常に圧倒されてね。松永久美子さんという、当時「生ける人形」というふうな言葉でマスコミに報道されていたこの人は、小児水俣病でありますけれども、完全に植物人間になってしまった患者であります。それからもう一人はユージン・スミスの写真で世界的に知られるようになった胎児性患者の上村智子さんという、この二人の患者に最初に出会いまして言葉が出てこないほどの強烈な印象を受けました。この人たちの現実から私

はもう逃げることはできないというふうに思ったんですよ。同時代を生きる一人の人間として逃げてはいけないという気持ちにさせられて、実は 30 年続いている。たぶんこれから命ある限り水俣とのつきあいは、あるいは水俣病の研究は続けていきたいと考えております。

30 年前に私が水俣病事件とはこういうものだイメージしていたものと、30 年後の現在私が目の前に見ている水俣病事件は全く変わってしまいました。どういうふうに変ったかといいますと、30 年前はとりあえず一次訴訟の、特に法律問題であったわけでありまして、非常に小さな限定された問題だったわけですね。ところがその後、水俣病に取り組み、勉強し研究を重ねるにつれて、私にとっての水俣病事件というのは巨大な像になって見えてまいりました。今ではもう一生かかってもこれは解明が難しいのではないかと。水俣病という巨大な事件を前にすると、私たちの力は本当に小さなものであって、これを解明するなんて、とてもとても。特にその全体像を解明するなんてことは途方もないことではないのかなと、そういう印象を持つに至っております。

近代日本の座標軸としての水俣病

それからもう一つ違った点というのは、当初水俣病に出会った頃は、ごく常識的なとらえ方をしていました。要するに、これは戦後日本を代表する公害事件であると。しかし 30 年経った今は公害事件という、そういう枠組みにはおさまらない、非常に深い意味を持った事件であるというのが今の私のイメージであります。事実、30 年つきあう間に、私は水俣病というものを一つの座標軸にしながら近代以降の日本を考える、あるいはグローバルな問題を考えるようになってきております。全く個人的なことではありますが、私の頭の中には水俣病事件の年表が、特に努力したわけではなくて、いつの間にかインプットされております。現代史の問題にしても、あるいは今世界中で起こるいろいろな問題にしても私自身はいつもその水俣病事件史年表というものをインデックスとして見ています。たとえば 1955 年に日本の戦後史の中

で何があったかということを調べる時に、水俣病事件史の中では1956年の公式発見直前の年で、この事件が起きたときは水俣ではこういうことが起きていたと自然につなげて、日本の戦後史やあるいは世界のいろいろな出来事を理解していくようになりました。私の専門は、本当は法や裁判でありまして、法律学者としての30年を総括するような最終講義を熊大で致しました(1999年2月22日)。今日はそのことではなくて、水俣病事件を通してどのように日本やあるいは現代の世界というものを今自分が見ているかということを少しお話ししてみたいと思います。

私が水俣の問題を通して日本、あるいは世界を見るという場合の座標軸は二つありまして、一つは時間的なタテ軸の座標軸があります。もう一つはヨコ軸の座標軸でありまして、これはグローバルな視点ということになります。水俣病事件というのは、明治以後百数十年の日本近代化の歴史と、20世紀の科学技術の驚異的な発展という二つの視点で水俣病の問題はとらえていくことができるし、とらえるべきではないかなというふうに思っています。また逆に、水俣にこだわることによってその両方に我々のパースペクティブが広がっていくと考えているわけです。これは単に観念的に考えたわけではなくて、水俣病に関わった30年の経験の総括として、現在、私はそういう視点を身につけるに至ったと思っています。

まず、タテ軸の話から致しますと、水俣病事件というのは一言でいえば明治以降の日本の近代化、工業化の国策が産み落とした事件であると考えております。日本は遅れて近代化の道を踏みだした国でありまして、この百数十年の間、先進国である欧米の工業国に対して一刻も早く追いつき追い越せということで、やってきたわけであります。そのために役立つもの、必要なものはどんどん輸入する。これは学問もそうであります。輸入して日本の近代化のために役立てる。こういう日本の近代化の歩みは、いろいろな言い方で特徴づけることができると思います。

「上滑りの近代化」

欧米のように、長い時間かけてまず人と人との社会関係や社会構造から徐々に近代的な関係ができていく。その基盤の上に産業が発達していく。そういうコースが日本はとれなかったということです。江戸時代からいきなり近代へと飛び込まざるを得なかったわけでありまして、どうしても急ぎ足の近代化にならざるを得ない。夏目漱石の言葉を借りると「上滑りの近代化」にならざるを得ない。つまり、本来は犠牲にはしてはならない、切り捨ててはならない価値をどんどん切り捨てたということを意味しているわけです。そういう意味で日本の近代の歩みは非常にゆがんだ、文字通り工業化の一点に絞って国力を付けて富国強兵をはかり、そして戦後は経済大国へと発展していくという歩みだったわけであります。

かつて明治 40 年代に夏目漱石は有名な講演をいくつかしております。漱石という文学者は明治から始まった非常に歪んだ近代化というものに真っ向から取り組み生涯格闘した作家の一人だと思います。そういう者として、漱石はいろいろなエッセーを残しております。例えば我々は江戸時代には鎖国制度の中で日本独自の文化を花開かせ、教育を含めて近代化の資産を蓄積したわけですが、そういうものをじっくり再評価し、その基盤の上に日本の近代を展開していくという余裕がなかったわけですね。伝統的な文化はみんな価値がないものとして切り捨ててしまい、いろいろな西欧の技術、あるいは制度や思想を輸入しながら、大急ぎで近代化をしてきたわけです。私は、日本の近代というのは未完成であると思っています。本当は近代なんてとっくに卒業して、我々は現代まできている。しかも経済的にいえばアメリカに次ぐ経済大国となって最前線にいると思われているけれども、実際はそういう面だけではなくて、個人の自由や住民自治を基盤にして近代社会をつくるという、工業化以上に重要な目標は、未だに達成されていないと思うのです。

自治意識を田中正造に学ぶ

例えば、公害事件でいいますと、最初に大きな問題となったのは足尾鉾毒

事件であります。足尾鉍毒事件で忘れてならないのは田中正造という思想家ですね。おそらく田中正造という思想家を抜きにしては足尾鉍毒事件を考えることはできないでしょう。その田中正造が生涯をかけて追求していたものが二つあったと思うのです。一つは自治の問題です。足尾鉍毒の問題を処理するために、谷中村という一つの村が勝手に潰され、それによって遊水池ができる。一体この村の自治はどうなるのか。この廃村計画は村民には一言の相談もなしに、当時の栃木県議会で秘密裡に決定され強行されてしまったのです。皆さん、自分が住む地域、自分が住む村や町や市の問題は、そこに住む人々の意思でもって基本的には決定していくべきものですよね。住民の意思というものを全く無視して、誰かが頭の上から決定を下ろしてくるというのは、とてもかなわんし、そういうことは受け入れられないですね。それが自治の意識であり、田中正造が追求した問題であります。それとは裏腹に村民の人権は無視されました。足尾の鉍毒事件を処理するために、一つの村を潰して、それを大きな遊水池にしようという無茶苦茶なことを決定した場合に、なおそこに住み続けたい、先祖代々の土地で田畑を耕して、なおそこで生きたいという人たちの人権は一体どうなるのかという問題が出てまいります。それが田中正造が生涯かけて追求した問題であったと思います。しかし、皆さんご存知の通り、田中正造の夢はついに実現しないまま終わってしまいました。そして足尾鉍毒事件は「解決」したことにされてしまったわけです。

整備された法体系と現実のギャップ

このように夏目漱石が明治40年代に、これこそが日本の近代の問題だといったこと、あるいは田中正造が足尾鉍毒事件を通して、日本が欧米先進国に肩を並べられる近代国家となるために彼が掲げた課題というのは、今日の水俣の問題を通してみても依然として未解決であり未完成であると言わざるを得ないと思います。

時間もありませんので細かいことは申し上げませんが、例えば、私の専門

である法律学でいいますと、六法全書をみる限りでは実に立派な、環境公害関係でもおそらく世界でも有数の立派な法体系ができております。しかし、実際にその法律を使って行政がやっていること、実際にその法律を適用して裁判所がやっていることとの間には、非常にギャップがあります。そういうギャップを水俣の事件を通して我々は教えられてきたわけであります。

それから日本の行政や企業の体質をみると、果たしてこれが近代的な国家の体質といえるのかと思われるような古い体質を我々は繰り返して見せつけられてきました。それから先ほど原田先生が言われた日本の近代医学から現代医学を含めて、日本における学問の底の浅さ、日本の近代的な学問というのはたかだか百数十年しかたっていないけれども、最初は全部輸入の学問であつたわけですね。それを一生懸命吸収し、それを徐々に自前のものとして現在に至っているわけですが、水俣病を通してこういう学問というのは本当にまだまだ底が浅いと感じます。先ほど原田さんがいわれたように、近代科学なら当然やるべきごく基本的なことが何にもされていない。水俣病医学は四十数年、莫大な時間と労力とお金をかけて水俣病に取り組んできたわけでありますけれども、その結果一体何ほどのものが解明されたのか。何ほどのことが確たる成果として残っているのかという疑問があるわけであります。そこにはやはり明治以降の日本の近代化の問題が関わっていると私は思います。

最後にヨコ軸の問題、グローバルな問題を少しお話しして、私の話を終わりにしたいと思います。間もなく 20 世紀は終ろうとしておりますが、人類の歴史の中でこの百年というのは非常に特徴のある百年であつたと思います。おそらくこの百年に人類が消費したエネルギー、産業活動で破壊した自然環境というのは、何万年もかけて人間が自然を改造しながら食物を得たりいろいろなものをつくってきたのに匹敵するほどの急激で巨大な環境破壊をしてきているわけですね。そういう意味ではこの百年というのは長い人類の歴史の中で、非常に異常な百年だつたと思います。何が一番特徴かというと、この百年の間に科学技術が驚異的な発展をした。発達した科学技術が工業と結び

ついて、巨大な工業生産力というのものを作り上げてきたわけであります。その結果、確かに豊富で便利な商品が次から次と供給されてまいりました。私は昭和一ケタの最後の世代でありまして、戦前の生活も知っているし、戦中戦後の本当に乏しい生活も知っております。戦後だけを考えてもこの50年の間にどれほど日本人の生活が激変してきたかということを個人の体験として知っております。今我々がエンジョイしている非常に豊かな物質生活というのは、たかだか1965年以降、大衆化していくのは1970年以降であります。そもそも交通事故の統計をみますと、1965年以前はほとんどなく、バスやトラックの事故、営業車だけです。ところが1965年を境にして普通の人たちの事故が急激に増えてくるわけです。要するにモータリゼーションと平行しているわけですね。それは裁判の統計をみましても、交通事故訴訟というのは1965年以前はほとんどありませんでした。65年以降それが増えてまいります。このこと自体、我々の物質的な生活水準というのは1965年から75年くらいにかけてかなり劇的に変わってきたということを象徴的に示していると思います。

水俣病は豊かな社会の持つ、もう一つの顔

そのようにして、現在、我々は豊かな生活をそれなりにエンジョイしているわけでありますけれども、忘れてならないのは、非常に大切なことを犠牲にして初めて実現しているということです。確かに戦後の50年というのはある面から見れば非常に成功した50年ではあります。戦争に負け廃墟から出発して、これだけ巨大な工業生産力をつくりあげて、GNPにおいてもアメリカに次ぐような経済大国に達したということは、ある意味では大変な成功の物語であります。ただ、この成功物語にはもう一つの面があるということを忘れてはならないわけで、そのことを繰り返し繰り返し私たちに問いかけているのが水俣の事件であると思います。水俣病というのは我々が今エンジョイしているこの豊かな社会の持つもう一つの顔なんですよ。その両方を見て初めて戦後の50年、あるいは現代の豊かな日本社会が何であるかということを

我々は考えることができるわけであります。もう時間がありませんから後は端折りますが、おそらく日本が明治以降歩んできた道、あるいは戦後 50 年歩んできた道をそのまま 21 世紀に延長していったとしたら、しかも途上国がみんな日本を見習い日本に追いつけと競争する道を歩んでいったとしたら、おそらく人類の未来はないでしょう。

我々は根本的にこれまでの生活のあり方、あるいは社会全体のあり方を考え直さなくてはいけない。そういうことを私は水俣を通じて学ばなければならないのではないかというふうに思っているわけです。

<司会>

どうもありがとうございました。いろいろご質問もあると思いますがもう一人羽江先生からの発言を受けて、その後、討議に入りたいと思います。

同和教育の視点で水俣病患者の人権を

<羽江>

ここに立つことを最初ずいぶん断ったのですがけれども、私のように水俣病問題の外側にいる人間が、原田先生や富樫先生と同席することがこれからの水俣病問題、あるいは水俣地域の問題を考えていく、さらに富樫先生のご発言にあった世界のあり方を示すことになるだろうと思い、出た次第です。

学生運動真っ只中の学生時代

水俣病が公式に発見されたと言われている 56 年、私は大学浪人一年目でありました。翌年大学に入るわけですがけれども、たまたま入ったところが熊大だった。ですから水俣病の起こっていること、あるいはそれに関わる報道は、私の頭の中に入っていました。あるいは水俣病の患者さんのことだけではなく、入る直前に起こりました元ハンセン病患者の未感染のお子さんたちが黒髪小に入るということで揉めに揉めた事件があったことも、入るに当たっては頭の中に入っていました。さらに、たまたま入った時期が悪かったのかと

いう、なんか歌のせりふみたいですけれども、私の学生時代は花の全学連の時代で、本当に幸せな学生運動が体験できた時でした。振り返ってみると歌と踊りの学生運動からきちんと社会的な発言をする学生運動への転換を成し遂げて、原水爆禁止運動、学校の先生方の勤務評定導入に対する反対闘争、60年安保、それに先立つ警察官職務執行法改悪というような政治的社会的なテーマが連続した時期でした。そういうものに学生自治会を中心として息つく暇もないほどに関心のある学生たちは追いまわられていたといってもいいと思います。ですから今あげました、60年安保あるいは三井三池の闘争などと比べると、当時、水俣病互助会の患者さんたちの闘争というのは周辺部にあったように思います。

そういう私でしたから気にはなっているけれども特別に体を運ぶというようなことはありませんでした。相思社（患者の支援組織）の皆さんたちの運動もあり、花田さんの言葉で言うところと署名をしたりカンパをしたりするというようなことはやってきましたけれども、それ以上ではなかったと言えばその通りです。

部落問題研究会創設

その後、学部から大学院、研究者になる道をやむを得ずたどるわけです。そして学園大学で社会学と部落解放論を担当するに至るわけです。部落問題に関しましては学生の時に熊大で最初に部落問題研究会をつくったメンバーの一人です。そういう中で部落問題にしましても、水俣病の患者さんの運動にせよ、研究者として、どう関わるかという発想を持てなかった。今でも持ちきれていません。そういう意味でもこの水俣学では外側にいるような気がして仕方がありません。敢えて言えば、人間として生きることをきちんと見つけている人たちと関わっていたいという関わり方でした。94年8月の東京展、水俣セミナーで富樫先生がこんなふうにおっしゃいました。「25年も水俣病事件に関わってきたので、私は水俣病事件のプロとされている節があるが、私個人は全くそういう自覚はない。長く関われば関わるほどこの事件の

巨大さと底深さを感じさせられている。従って水俣病事件についての明解な話をするという自信はなく、あくまでも一つの問題提起として受け止めていただければありがたいと思う」。これは富樫先生の言葉ですけれども、原田先生も同じような言い方をされます。これはお二人が謙遜しておっしゃるせりふだとは思いません。水俣病事件を、単にメチル水銀による汚染の広がり大きさであるとか、あるいは犠牲者の多さというような意味で巨大な事件であるというだけでなく、あの総合調査団の皆さんがお書きになり、社会科学系の部分だけ『水俣の啓示』（色川大吉 『新編・水俣の啓示』筑摩書房、1995年刊）という形で再刊されたものを見ておきますと、人間の近代、あるいは現代史を問う、あるいは哲学というような形で問われている巨大な事件だと考えます。そのことに研究者として関わるか、あるいは私のように一人の市民として関わるかの違いではないかというふうに思うわけです。関わった皆さん方は未来を見通すという点で、問題意識が共通であるように思います。

地域における共同トラウマとしての水俣病

熊大の丸山定巳さんがここに立った方がいいとは思いますが、たまに社会学の研究をしている人間として振り返ってみますと、全国で社会学研究者で、水俣病問題を文字にしてレポートしたのは、ここに持っていますが70年の『社会学評論』に掲載された、飯島伸子さんの論文が最初です。これも実は「産業公害と住民運動」というのがメインタイトルでして、サブテーマで水俣病問題を中心にとっているわけなんです。多くの人の目に触れているのは、色川大吉さんを団長とする『総合学術調査団』の報告書ということになるかと思います。その後、『水俣病事件研究会』での熊大、丸山さんの研究、それから、現在久留米大学におられる鈴木広先生の研究があります。最近の研究は今言いました鈴木広先生たちのグループの『都市環境パラダイムの構築と市民参加』という98年の報告書が一番まとまっています。鈴木先生たちは1977年に一度水俣に入っております。

鈴木先生たちの手法というのは、今度の報告と同じように、基本的な大き

な部分は水俣市民を対象とした意識調査の結果を踏まえて分析するという形をとっております。これは、学術調査団の研究とは違いますね。こういう量的な意識調査の手法はあえてとらないデザインをし、そして「聞き取り」ということを通して調査を仕上げていく、研究を仕上げていくという点で非常に対照的です。この総合調査団の研究の手法というのが、当時としては画期的であったと同時に、一地区を中心とした研究のあり方としては注目されてよいものだと思うわけです。鈴木広先生に今度お会いしたら、なぜ総合調査団とは違った社会学的な手法をとったのかということを話題にしてみたいと思っています。

鈴木先生たちの報告では77年と96年の二つの意識調査を比較しており、その比較を通して指摘されていることが5点ほどあります。その5点を簡単に紹介いたしますと、水俣病の患者家族の孤立状態が継続していること。それが第1点です。2点目は患者救済をめぐる市民が分断、分裂されている現実。3点目は、全体として、市民意識は患者救済から地域づくりへとシフトしている。問題への関心が移行しているということです。4番目に指摘していることは、水俣病事件は水俣市民の共同トラウマだということです。水俣病事件は共同トラウマとして存在しているというとらえ方をなさっています。5点目に、そういうことによって不鮮明な将来の見通しを市民がもつことにつながり、現在言われている環境都市水俣という地域づくりも、当面これしかないという選択の色彩を帯びているという鈴木先生たちの指摘です。

実は40年にわたる水俣病事件をめぐる水俣市民の公害、あるいは環境破壊に対する知的水準は、どこの地域よりも高い。それは経験の上に立ち、当面これしかないという選択だということを付け加えておかなければならないと思います。この報告は、社会学で最近出された中では、まとまっていると思います。ところでそれを踏まえた上で水俣病と近代化による被害の実態を明らかにするという大枠をもった訪問調査に参加した社会学者たちあるいは社会学者たちは、その意味では最近の鈴木先生たちの研究を見ましても共通していると思います。ところで、そういう研究者たちの動きとは別の動きを

見ておかなければいけないと、私は思うわけです。

公害教育から同和教育の実践へ

というのは水俣では、かなり早い時期から公害教育という形で小中学校、高等学校の先生たちが水俣病事件にかかわっておりました。

当初は公害教育という形で取り組んでいましたが、それを踏まえながらも、公害教育では終始できないという形で、当時 70 年代に大きなうねりになっていく同和教育、日本の人権教育という文脈の中で、水俣の学習に取り組まなければならないのではないかとという取り組みです。そういう気持ちを持たれた、例えば石牟礼道子さんの旦那さんであるとか、あるいは今も元気に活躍なさっている広瀬武先生、この方は市会議員の日吉先生の娘婿に当たる方ですけど、これらの先生たちの水俣・芦北公害研究サークルというのが、ずっと教育実践活動を続けてきております。この人たちの実践に伴ったかなり多くの研究あるいは、水俣の地域分析を含む様々な研究があります。そういう中で、最近私たちが広瀬先生としばらくやりとりした事件があります。

「水俣市人権を守る条例」、否決

それは去年(1998 年)、水俣市議会で現在の吉井市長が水俣病問題を教訓としながら、障害、年齢、性別などによるあらゆる差別をなくし、人権を守るための市民の責務および施策等について必要な事項を定める、「水俣市人権を守る条例」を議会に提案しました。これが水俣市議会で 98 年 3 月開会の定例の議会を通るかと思ったら否決されたのです。人権という視点がかなり早い時期からありながら、そしてある一定の決着をみるに至って「もやい直し」という形の作業が始まっている中において、なぜ人権条例が否決されるのでしょうか。ところが、それに対して水俣市民は大きな関心を寄せなかった。そのことで広瀬先生たちは非常に立腹もし、落胆もされていました。私は何度も電話や直接会って話をしました。人権という概念あるいは視点が、人権の問題にふれてはいるものの、問題の解決に向かわない。それどころか問題

の解決を無視してしまう。人権という視点から再び水俣のことを、患者さんをめぐることをつぶさに検証してみるという作業の弱さ、あるいはそうしたものの成果が、実は市民の財産になり切れていない現実がまだある。その辺のまとめ方、あるいは視点をもう一度きちんと全面に掲げた研究があっているのではないかと私も思うわけです。

このことに関して個人的な経験をもう一つ話させていただきますと、実は一番外側にいたはずの私が、熊本に來まして最初に水俣に足を運ばざるを得なかったのは、お亡くなりになりましたが運動を引っぱってこられた川本さんがきっかけです。川本さんのところにあるたくさんの資料が相思社の歴史考証館に患者に対する嫌がらせというタイトルで何点か展示されております。その中身は、病む人、あるいは女性、市川房枝さんの名前を上げながら女性差別とか、あるいは部落の人たち、部落という言葉を使いながら、「病気でない奴が病気を名乗ってやってる。そういう運動なんかはやめろ」という内容の川本さんに出された葉書があります。今でも相思社の考証館に行くと、それは確認できます。ちょうど90年前後というのは、相思社の皆さんたちや全国の水俣病を支援した人を中心にして資料展を各地で開いていました。その中でその事実が私の耳に入ってきました。そして具体的に水俣に引きずり込まれたきっかけになったのは、その川本さんに対する嫌がらせの手紙に対して相思社がつけた解説です。部落の人や在日の韓国朝鮮の人たちや女性、あるいは貧乏人、乞食という言葉も出てきておりますけども、そういう言葉を使って水俣病の患者さんやその運動をしている人に対して嫌がらせをしているような解説だったのです。福岡の同和教育に携わっていた先生と部落出身の子どもたちと一緒に展示会に来て、それにふれたときに、子どもたちは「こんな展示でいいんだろうか。自分たちは水俣病の患者さんに対する差別、あるいはその努力というものを学ぶことを通じて、自分たちも部落解放運動、部落にうまれた子どもとしての生き方なり、あり方というものを考えようとしてきたはずだけれども」と絶句しました。この子どもの気持ちを受けて、相思社に対して「何とかありませんか、あなたたちは水俣病の患者さんの人

権というものをどういうふうにお考えになるのですか」と引率の先生から問題提起があったわけです。

水俣における内なる差別、外なる差別

それをどのように考えていくか、その解説をどう作り直すかというところで知恵を貸せということでした。知恵はありませんでしたけれども、関わったわけです。それは91年の夏のことでしたけれども、その年から水俣市で市の生涯教育（当時社会教育）の担当者たちが川本さんや浜元二徳さん、あるいは相思社の皆さんの知恵を借りながら、公然と市民の社会教育活動の一環として水俣病を知る講座というのを年に5回ほど開催するようになりました。それに参加させていただいて、参加された方たちから簡単な聞き取りをやったわけです。水俣病の患者さんたち、あるいは広瀬先生たちのグループの言葉で言いますと、水俣病の患者さんたちは水俣に住みながら、患者さんではない人々から、例えば水俣病という名前がなかったならというような形で様々な差別を受けている。これを水俣の先生たちは内なる差別というふうに表示されています。

他方、子どもたちを例にとりますと、サッカーの試合で負けた水俣のチームの子どもたちが、県外あるいは県内で水俣外の中学生から、「そばに寄るな、あいつらが寄るとうつるぞ」と言われた。あるいは同じ船に乗り合わせたときに水俣の子どもたちは「寄るな、うつる」と避けられた。今でもなお水俣出身であると名乗れない若者がたくさんいます。そういう状況のことを公害サークルの先生たちは「外なる差別」というふうに表示されています。こういうふうに「内なる差別」あるいは「外なる差別」という形で把握されている人権の問題、そこに焦点を当てた教育実践が積み重ねられています。

石田雄さんも差別と抑圧というような形でふれられていますけど、それを総括的に一つの研究の視点あるいは考えていくときの視点として持ちながら、水俣の教訓を引き出す作業が私には残されているような気がします。その辺をもう少し考えていけば、二人の先生方の、「おい、誰でもいいから関心

があれば入れよ」という呼びかけにも応えられるのではないかというふうに思っているということで、報告にかえさせていただきます。

<司会>

ありがとうございました。ここで私の方からパネラーの方々に共通の質問を一つさせていただこうと思います。

司会の権限を越えて評論させていただくと、3人の先生が全て「私にとっての水俣病の関わりとは何か」というところから話を始められるわけです。たぶん水俣病事件というのはそういう形でしか語れないのかなとも思います。その上で、原田先生、富樫先生の場合にははっきりしています。これは羽江先生も今引用されましたように、この40年間で分かったことは、水俣病のことがよく分かっていなかったということが分かった、と簡単にパラフレイズするとそうなるかと思います。例えば、羽江先生のお話しにありました、水俣の教訓を差別の観点からどういうふうに引き出すかということですが、実は水俣の差別の問題というのは石牟礼道子さんの『苦海浄土』以来、語られ、書き続けられているわけです。にもかかわらず、今日なお問題にしなければならない。

そこで素直に思いますのは、これまで30年40年かかってある意味ではできなかったことを、名前はともかく『水俣学』ということでやっていこうという志はあるとしても、果たしてできる保障はあるのですかということです。あと10年後20年後にやっぱり分かってないと確認することになるのではないかと。挑発的ですが、こういう不安を感じます。そこで、それぞれの先生方一つずつ具体的におたずねしたいと思います。

まず、原田先生からは学際的な協力が必要であろうと。それから川本輝夫さんの例をあげながら、素人と専門家の関わり方、あるいは実際にはそれは逆転していて、素人といわれる人の方がはるかによく知っている。こういうあたりから何か構築できないかということですが、ただ私、聞いておりましてよく分からないのは、そのときに水俣学というものが対象とするものは何

なのか。今日の先生の話ではさしあたり医学に限定なさっていたと思いますけれども、もう少し広がりのあることがあるのではないかという感じがしますので、その点をおたずねしたいと思います。

富樫先生に関しましては水俣病事件、富樫先生の中のクロノロジーを縦軸と横軸に十分に分解されて、いわば文明論とでもいいますか、大きな問題にたどり着かれたということですが、水俣病事件と今日、富樫先生が話されたこととの間には、ちょっと飛躍があるのではないか、時間の制約のためと思いますが、何か媒介項がないと飛びすぎているような気がするのです。逆に言いますと文明論から、あるいは今の近代批判、近代化が不十分であったということをいうためには、別に水俣病事件でなくてもいいのではなかったか。逆に言うとその間の媒介項というのはどのように考えるのかを、おたずねしたいと思います。

それから最後の羽江先生のお話ですが、差別の構造というのは、水俣においてもあるいは被差別部落においてもあるいは朝鮮人においても存在していると思います。被差別部落の人々が差別から解放されているかといったら、差別されているから差別から解放されているとはとても言えないということがありまして、そうした構造をやはり水俣でも確認されているという気がしないでもないです。その事実を確認するということは貴重ですが、そこから出口の手がかりがないものか。水俣の教訓というふうにいるのは、ある意味ではたやすいと思いますけれども、もう少し一般論ではなくて手がかりのある話をしていただければと思いました。

それではこれから、全体討議にしたいと思います。ではお願いします。

医学の枠の中に閉じ込めてしまった問題

<原田>

私は医学が専門ですので医学の立場から申し上げたのですが、水俣病を40年みてきて一番問題だったのは、これだけの大きな社会的・政治的な問題を医学という枠の中に閉じ込めてしまったことだったと思います。非常

に抽象的な言い方だと思うのですが、もっと言うなら症候群の中に閉じ込めてしまったことがやはり最大の問題だったと思います。だから私は、水俣学というものがあるとすれば、それはいろいろな立場の人たちが自分の持ち場からみてお互いに影響を与え合う。例えば、医学からみた水俣病、あるいはマスコミから、法律からといろいろな切り口があると思うのです。お互いにみていくことでお互いの風通しをよくして、そしてお互いに自分の専門分野でさらに新しく展開していく。そういう場として私はイメージしています。その結果、何が水俣の解決になるかは分からないですね。おそらく10年経っても水俣の現状はほとんど変わらないかもしれない。しかしそういう作業がもし丹念にやられるとするならば、それぞれの分野で、例えば私は医学ですけども、水俣の問題は解決できないかもしれないけれども、水俣を通じて学ぶことが多少なりと、私の専門の分野に活かされてくるのではないかと。たとえそれが少しずつだとしても、次々と若い人たちに受け継がれていけば、それぞれの分野で何かが実るのではないかというふうに思うのです。そんなに学際的研究をしたから、10年後には水俣病問題が解決するなんて、そんなふうには思ってはいません。ただ今言ったような作業を続けることによって、それぞれの生き様とか、それぞれの学問、あるいは専門的な知識に何かプラスになってくれたらというふうに思っています。

水俣病の示唆するもの

<富樫>

先ほどの花田さんのご指摘はもっともでありまして、問題提起としてもあまりにも大雑把すぎるのではないかというご指摘ではなかったかと思います。ただ私はある意味では意図的にやっているのです。今までは水俣病の問題というと患者の認定・補償の問題、それが終われば一件落着と、あまりにも思い込みすぎたのではないかと。東京から見ると未だに水俣病というのは九州の一地方のローカルな事件というとらえ方をされてしまうところがあるわけですから。それに対して、私は敢えて異議を申し立てたい。そんなレベルの問

題じゃないと言いたいために申し上げたわけです。

それから、この間亡くなった川本輝夫さんが「今水俣で必要なのは哲学だ」というふうに、どうも最近言っていたようなのですが、そのことを2、3日前の東京新聞に、編集委員が書いていて、昨日届いたので読ませてもらいました。私自身は30年つきあってきましたが、川本さんからついぞそういうことは聞いたことはないのですが、どうも亡くなる少し前くらいに、今水俣に必要なのは哲学だということを川本さんがぼろっともらしたというのです。それを読んで私は非常に意外な感じを受けたのです。というのは川本さんくらい、その時々の問題にこだわって、30年闘い続けた人はいませんよね。一人の患者の認定を勝ち取るために、どれほどあの人が頑張ってきたかということをよく知っていますからね。いつも話が細かいし具体的ですよ、川本さんという人は。そういう人があれだけの闘争をやってきたあげく、今水俣に必要なのは哲学だと思ったというのは、ある意味では示唆的だと思っています。だから大雑把でも、とにかく今パースペクティブをもっともっと広げていくという努力が必要だと思います。

一方では、水俣の問題を早く終わらせたいという人たちがいて、そのためにできるだけ水俣病を地方的な小さな事件に封じ込めたがっているわけです。それに対して、あえて私はアンチテーゼを出すべきだと思っています。しかしそれと同時に、調査をしたり論文を書きます。論文を書くときは、こういう大雑把なことは言いませんよね。それは徹底して資料に基づいて実証的に分析していきます。そうしないと説得力はありません。今日はものすごく大風呂敷を広げましたが、一人の研究者としては、実証的な緻密な分析を通して大きな問題につなげていくということに実際はなるわけです。両面が必要です。大雑把なことだけ言ってもだめ。かといって非常に具体的な局面や問題だけでもだめですね。両方必要ではないかというのが私の考えです。

人権問題として個別に取り上げる作業を

<羽江>

研究者が、あるいは研究者たちではなくて支援者あるいは患者さん本人が40年もかかってやってきたこと、そこからどうも水俣病事件の全体像がはっきりしてこないということに、これから取り組めるのと問われたわけですけども。一つはこの40年間の水俣病事件史をみても、お二人の先生方がおっしゃったように見る本人・主体が変わることによって、水俣病、あるいは水俣病事件が像を変える。そういうものだろうというようなことをおっしゃったんですけど、私もそう思うわけです。付き合えば付き合うほど、だんだんこちらが深みにはまるという感じですね。足尾鉍毒事件を例にしても、今日でもなお研究者の研究がある。栃木の一地域の人たちは地方史研究という形で研究を続けている。そこに水俣学の根拠を求めるならば、水俣学というのは、次第に像を形成していく可能性はあると思います。その条件としては、みんなができるだけ広い形で、研究者だけではなくて素人を含めて参加するような、そういう研究のあり方が求められているだろうと思います。それから具体的に差別と被差別という関係が認められる水俣に解放の手がかりがあるのかというと、まあ具体的に事件を通じて云々ということではいま語れません。けれども、仕方がなしにこれしかないという形で選択されているもやい直しに象徴される、あの地域づくりがあります。水俣再生の地域づくりというものの、イメージの貧困さが現在認められますが、差別・被差別の関係をこえる試みだと思います。それから原田先生がちょっと指摘されましたけど、川本さんの言葉を使いながら福祉ということが最終的になるだろうということを言われた。私たちの人権認識の確かさと具体性を考えると、これからの重要なテーマであり、それを少し追ってみないと解放の手がかりはないだろうと思います。

ただ言えることは、川本さんを部落民と同じようなことをする奴だという言葉方で罵倒した嫌がらせの手紙は、実は被差別部落民が水平社以来やってきた糾弾闘争は「怖い」というイメージと重ねているわけですね。無理難題

を押しつけて「うん」と言わせるのを川本さんとだぶらせる。あるいは理屈に合わないことを言うのは、私みたいな年代の人間というのは「朝鮮の人たち」が言うことだと、あるいは「中国の人たち」が言うことだという偏見が、国民学校の教育を受けている人間にはインプットされているわけで、非常に有効な嫌がらせの言葉になるわけです。そういう意味では水俣病の患者さんに対する差別といったときに、あの嫌がらせの手紙に象徴されるように全ての被差別者に対する差別の手法と思想というものがあそこにぎゅっと集まってしまった思いがします。その辺で、もう一回石田雄さんが政治的な分析をなさったわけですけど、石田さんの言葉で言うと、市の行政の頂点から下に行けば行くほど非政治的になり、しかもそこで政治的なイデオロギー性は貫徹する。水俣病を忘れるためのイデオロギーが貫徹し、横の広がりの中で、同調性が作り出される。その指摘をもう一回、分断分裂されている水俣の人々の中にある人権問題として個別に取り上げる作業をしていくときに、解放の見通しはあると私は思います。

質疑応答・意見交換

<司会>

ありがとうございました。ちょっと話が上品になりすぎたかなという気がしております。と申しますのは、ご参加の方々の顔を見ておりますと、もちろん研究者という職業の方もたくさんいらっしゃいますが、その卵の大学院生もいますし、それと先ほど羽江さんが触れた相思社のリーダーもいるし、水俣に住み着いて患者の支援運動をしている人もいます。もちろん学生も、それから一般市民の方々の参加も多い。従いましてここからはもう少しフリーに議論をしていければと思います。それではどうぞご自由にお手を挙げて質問なりしていただければと思います。よろしくお願いします。

THINK GLOBAL、ACT LOCALの視点を

<会場>

熊大の学生ですけど、お話をうかがっていて水俣学というものが見えてこないというのが正直な感想です。水俣病についての話をしておられるのか、水俣学というもう少し理念をもった体系的なものに昇華させてお話しされているのかよく分からないというのが正直な感想です。で特に思ったのが、花田先生がおっしゃった、富樫先生の文明論的な話になりましたけど、たぶん富樫先生みたいなグローバルな視点が水俣学を構築するために絶対必要ではないかなと思います。そういう学問的なものにするのであれば、よく環境問題で言われるようにグローバルに考えてローカルに行動する、THINK GLOBAL、ACT LOCALと言いますが、おそらく今座っておられる3人の方というのは、ACT LOCALのことを言っておられると思うので、その方々がそろって学園大で学問をつくられるのであれば、絶対グローバルな視点というのは必須だと思われるのですね。そうしなければ他の先生がおっしゃったように負の遺産として活かす。別の国で別の人たちがいろいろなドラマとして起こす次の水俣病なりの被害を防げないのではないかなと私は正直に思って思いました。だからもうちょっと学問的な体系を探っていった方が非常に有効ではないかな。そこでグローバルな視点は絶対必要で、その上でローカルな行動も広がるのかなと正直に思いました。色々細かいことお聞きしたいんですけど、根本的な基盤が、まだまだ勉強していない学生ですけども、聞いて思いましたので、以上です。

<原田>

なんて答えていいのかわからないですけど、そんなにはまだ見えてないのです。ただ今までの水俣病の経験からすると従来のやり方ではいけないと思っているわけです。あなたが言う通りに、もっとグローバルなものを求めようとしていることには異論はないのですが、ただ、具体的に何をどうするかというのはそんなにまだ見えているわけではない。例えば、今から新しく

する人は新しく問題を見つけてやっていく。あるいは今まである程度やってきた人は自分のやってきたことを振り返るという中から、何が欠けていたかを考察して新しく方法を構築していく、そういう場としての学、まずだいたい「学」という言葉がいいかどうかということが問題ですよ。ただなんかそういう実践をしたり考えたり、それは他のことをやってもいいわけです。例えば足尾なら足尾のことでもいいし、ほかのことでもいい。その人たちがお互いに何かを持ち寄って、そして新しい、きざですけど新しい何かをつくろうとする場としてのもの、「学」というより、まあ交流の場でもいいですけどね、それこそ学問的な交流をし、お互いを批判し、さっき私がいくつかの例を上げたように、専門家という壁をお互いに突き破って新しい何かができないかということなのです。例えば教科書なんかには環境学とか何とか学とか最初に定義があるけど、水俣学にはそんなものはありません。むしろそういうものをとっ払って、今から、何か新しい知的作業のあり方を作ろうと考えているということではかないです。これが答えになったかどうか分からないですけど。

<富樫>

ちょっとざっくばらんな話をさせていただきますと、今度ここで、水俣病のシンポジウムをやるので、原田先生からぜひつきあってくれという話があり、いいですよということで引き受けたのですが、その後、どういうテーマでシンポジウムするのかいっこうに連絡がないんですよ。そしたら、何日前かにビラを送ってきまして、「水俣学の構想力を求めて」と書いてあって、正直ぎょっとしてしまいました。提唱者の原田さんは一体どういうイメージで「水俣学」なるものを考えておられるのかな。そういうことを最小限度まず事前に知らせてもらわないと、私はどうしようもないと思って待っていましたが、一向にこないんですよ。そのうち事務局長の花田さんから、ちょっと事前に打ち合わせをしたいという事務的な連絡が入りまして、そのときは花田さんに電話をいたしまして、「今こういう状況で非常に困っています。と

ところで司会をされる花田さんはどういうふうに水俣学というものを考えておられますか。そして今日のシンポジウムはどのような展開になるんですか」と聞いたら、「私も分かりません」と言うから、そういう状況なんですよ。まあいずれ言い出しっぺの原田先生にはペーパくらい書いてもらわないといかんなと思っていますけれどもね。ですから私自身の頭の中にも、ほとんど「水俣学」のイメージがまだ湧いてきてません。

ただ、ここで思ったことですけど、「水俣学」という言い方、ネーミングの付け方は、ある意味では極めて日本的だなという感じがしています。例えばアメリカとかあるいはフランスとかドイツで、こういうネーミングの付け方をするだろうかという、たぶんないと思いますね。だから、そういう意味では非常に日本的なイメージという感じがしています。おそらく欧米の人間からみたら、「水俣学」というネーミングというのは違和感があると思いますよ。ここにも欧米の方々が参加していますが、たぶん欧米の人たちはもっとかつちりとした学問の体系をイメージしておりますので、その中にふわっとした「水俣学」というものが出てくると、どこにこれを位置付けていいか分からないだろうと思いますね。そういうふうにまあ非常に柔らかいとらえ方で、これまでの学問とは結びつきにくいですね。むしろその辺にねらいを定めているのかなという気がしないでもない。つまり、これまでのかなり固定的な学問の体系なり、専門分野の細分化という現状に対して、ゲリラ的に風穴を開けるという試みですね。

「水俣学」という、なかなか定義しにくい、ふわっとしたものを投げることによって、今までの学問、あるいは水俣病事件で言えば、認定、補償、裁判などの形でバラバラに処理されてきたことに対して一つのアンチテーゼを出すという、そんなイメージではないかというのが現時点での私の受け取り方です。これでは全然お答えにはなっていないと思いますけど。

水俣学に期待して

<会場>

富樫先生と原田先生にご質問いたしますが、先ほどからあがっている問題ですが、私は今日、水俣学が今度学園大にできるということで期待して、はるばる田舎から参りました。

富樫先生の最終講義がございまして、私も行こうかなと思っておりまして、他の用件で参りませんでした。新聞記事に先生の最終講義の中で専門分野だけを守っているのは水俣病問題には取り組みなかったとありました。先生は失礼ですけど、民事訴訟法の講義を担当なさっていたとお聞きしております。

ところで「水俣病を告発する会」の最初の代表者は本田啓吉先生でございました。彼がいつも言っておりましたのは、「俺は文学を勉強しているのが問題だ。医者ならばいいけれども」ということをいつも言っておりました。もう一回申しますと、「俺は文学だもんな、医者ならばもっと活発な活動ができるけれども」といつも言っておりました。ところで先ほど富樫先生の報告にもありましたように、川本さんが哲学ということをおっしゃったことをご披露なさいまいけれど、水俣学の今後に必要なものは医学、法学、社会学、それから哲学、その他の学問でこれ以外にどのような学問に取り組んだならば、立派な水俣学ができるか、非常に雑な質問でございますけれども、お答えいただいたら非常にありがたい。田舎から期待してきました意義があるのではなからうかと思しますので、宜しく願いいたします。

<富樫>

この間熊大でやりました最終講義は、最後の結びのところで「越境」ということを申し上げたのです。私は30年水俣病の研究をやってきましたけど、それは振り返ってみるとある意味では越境者の歩みであった。越境者にならざるを得なかったという話をしたわけであります。これはどういう意味かと申しますと、水俣病問題とか水俣病事件というのは、非常に巨大な事件

であって、多面的な要素を持っているわけですね。ところが今の学問というのは非常に細分化されている。細分化しなければ、専門研究はやっていけないし、学界で認められないという状況にあるわけですね。それは日本だけではなくて世界的にもそうです。そういう学問のあり方と水俣病事件というのは全然マッチしないのです。

私は長い間大学では民事訴訟法の教師として飯を食わせてもらったわけだけど、そういう自分の本来の専門分野をしっかりと守って、水俣病にどれだけ取り組めるかという、接点は本当にあるかないかという程度ですよ、私の場合は。原田さんの場合は医学だからもっと接点は広いと思いますけどね。ところが、水俣のような問題は、細分化された専門分野を遙かに越えて、グローバルですよ。それに対して現代の学問状況ではトータルには向かい合えない状況にあるわけです。

この間も最後のところで、「私の30年の経験は、ある意味では学問はこれでいいんですかという意味も込められているんですよ」ということを言いました。それでは、水俣病は10くらいの側面をもっていて、10人のそれぞれの専門分野をもった人間が集まってやれば解明できるかという、そういうものでもないですよ。そこは非常に難しいです。医学だってものすごく広いですよね。臨床もあり病理もあり疫学もありますから。しかもその中でさらに分かれてるわけでしょう。そういう医学の問題にも首を突っ込んで、医学者とも討論しながらでなければ、おそらく法律の専門家として水俣病に取り組むということは不可能でしたね。同じことは、例えば2、3人の技術者とも討論し、水銀分析を専門とする人たちとも討論しなければならないというのが、この30年の経過です。そうすると否応なしに本業は疎かになるわけですね。学会レベルの、民事訴訟法学の業績というのは、本当に緻密な論文なわけですよ。ところが飯の種だけしか書かない。それ以外は、水俣病問題に取り組む。こういうことで30年やってきたわけです。そのことをあえて、学問上の越境であったと申し上げたわけです。

おそらく水俣の問題だけではなくて、今後出てくる問題は、多かれ少なか

れそういう側面が増えてくると思います。たとえば現代医学は一人の人間をたくさんの部品の寄せ集めと考え、部品ごとに専門化して、研究し治療をしていく。そのような取り組み方でいいのかということを私は考えているわけです。かといって、それぞれの専門をちょこちょこちょこつとかじって、はい私は水俣病の研究をトータルにやっていますと言えるかということ、これがまた言えないのです。そこはそれなりに、やはり専門的でなければいけないわけですよ。その辺のジレンマは非常にありますね。

<原田>

責任が重くなってきました。なんか言い出しっぺみたいになっちゃったのですけど。言葉だけが一人歩きすると困ると思います。今富樫先生が言われたこと、あるいは私が喋ったことでお分かりだと思いますけど、すでに今までやってきているわけです。また、その既存の学問ではどうしようもなく、その壁を実際に破らなければできなかったわけです。だから今までやってきたことなので、何かここで水俣学という新しいものができて何かが起こっていくという、言葉だけが一人歩きすると困るなと思っています。これは従来やってきたことなのです。それをもう少しきちんと確認して、そういったものを核にして、それにみんなでどんどん参加してくださいという意味なので、水俣学の専門家がいても何でもありませんし、決まった定義があるわけでもない。まあ、既存の学問の領域を超えて、手探りでやっていこうとしているということを付け加えさせていただきました。

差別の全体像を明らかに

<会場>

学園大学商学部の嵯峨でございます。先ほど羽江さんのお話を聞きながら思いましたけれども、過去の企業史や組合史を見ると、日本では典型的なパターンがあります。それは、例えば日本でもいくつか長期の争議というのはあったのですが、その典型的なパターンというのは、ある一定の時がく

ると必ず労働組合が分裂しました。いわゆる第二組合と呼ばれる多数派が膨れ上がりまして、それまで当事者だった第一組合が少数派に転落し孤立して終わるパターンですね。少数派組合として続いているところもありますけど、基本的には、争議というのは終わっていくわけです。

私たち研究者が、そういう争議について歴史を書こうとします時に、中心で闘っている人たちを主役にすることが多い。そうしますとあとは脇役とか、あるいはもっと言えば悪役になるわけです。途中から労働組合をやめていった人たちはせいぜい脇役で、会社は文句なしの極悪人になるわけですね。でも本当に大事なのは争議の全体をつかむことのはずです。会社の事情も明らかにしないといけない、それから「裏切り」と言われ、辞めていった人たちの事情も明らかにしなければいけない、もちろん最後まで闘い続けていった人たちの軌跡も明らかにしなければいけない。

私たちの学会の分野では、水俣病の場合もそうでしょうけど、患者さんたちと会社側が正面からぶつかっているという構造ですけども、その周辺には膨大な層がありまして、そこで当事者たちが孤立するわけでしょう。あるいは場合によってはそこから差別を受けるわけですね。そういう全体像を明らかにしないといけないというふうにずっと思ってきたわけです。

そこで先ほど羽江さんがおっしゃったことですが、水俣の市民にとってこれは一つのトラウマである、心の傷であったという表現の仕方、私はそれは非常にヒントになる言い方だと思うのですが。今後水俣学という格好で見ていく場合、その全体構造をつかむ場合に、患者さんたちについては相当明らかにされていますけれど、私たちも含めてそれを無視した人間とか、あるいは差別した側の人間、あるいは膨大な周囲の人たち、そういうものがあつたからこそある意味では悲劇だったわけですね。そういうところを今後大きな未解決な分野として考えていく必要があると思うのですが、いかがでしょうか。

<羽江>

これからのということになれば、それでいいだろうと思います。特に人権という視点で、まだまだ水俣病は終わっていないという認識に立つと、その差別する側とされる側の相克というものがあるし、それが水俣市全体あるいは芦北地域を含めて対立し、亀裂が入っているわけですね。また、その亀裂のレベルは多層をなしています。そういうことを踏まえた上でどのように水俣を再組織化していくか。その点を水俣学に引き寄せてみると、原田先生はたまたま患者さんの側に立って、そして努力をされたのですね。自分の専門知識を役立てられた。しかし原田先生のような医学者ばかりではなくて、環境庁や厚生省の手先として、いっぱい自分の専門技術や知識を役立てて名誉を得た方もいるわけですよ。そういう人を含めて水俣学というものを、ごめんなさいそういう人は入らないでしょうから、その人たちの知的な遺産というものを取り込み、なおかつ全体像を明らかにしていくということは、それぞれの分野で出来るかなというふうに思います。それほどトラウマという言葉が持っている意味はとても厳しい。未来を見通した場合にかなり難しい問題であり、癒されない傷ととらえられたら困るわけです。そうした場合に癒されない傷を持った人たちが手を結べるのかという問題が出てくるだろう。その辺のところで水俣病は終わった。水に流そう。という形を何度目かの水俣病は終わったという声の中に私は感じます。そういう意味でまだ終わってないよと言いたいのです。

<富樫>

今嵯峨さんがおっしゃったことは、非常に重要な視点ではないかと思います。これは今までの水俣病事件史のとらえ方とも大いに関係してくると思いますけど、とにかく68年から患者の闘争というのが全国で展開していったわけですね。闘争の論理というのは常に敵味方の論理です。中間はないわけです。結局、敵は徹底的に叩けと、味方は徹底的に守れということになっていくわけだし、敵のやってきたことは全て悪であり、味方のやってきたことは

善であるという勧善懲惡の論理になっていくわけですね。そういうのは闘争が継続しているときには、それなりの説得力を持ち得たと思います。ところが1995年の政治解決でもって認定補償の問題に大きな区切りがつかしました。まだ関西訴訟は残っておりますけど、大勢はもう決したという感じです。そういう状況の中で、改めて過去のしがらみというか、私は闘争史観といってるんですけど、闘争史観に縛られたものの見方というもののからある程度解放されて、今嵯峨さんがおっしゃったような今まで全く視野の中に入らなかったようなグループですね、水俣の市民でいえば中間層とか平均的な市民のところをきちんと分析してみるということとはとても重要なことではないかなと思いますね。

<司会>

まだ水俣学について議論が続いておりますが、そのあたりについて質問なり発言なりございましたら、宜しくお願いします。

近代科学の検証と再構築のきっかけに

<会場>

すみません、研究者の立場から。熊本学園大学の社会福祉学部の小林です。水俣学ということで色々と議論が展開しているようですが、原田先生のお話、富樫先生のお話、私社会学専攻しているもので羽江先生の話はちょっと別立てにさせていただきますけど。お二方の医学、法律学の立場からのお話、色々共通して水俣学を構想するにふさわしい、それを支えるだけの問題提起がなされていると思いました。要約的にいうとおそらく近代科学の方法論というのをどのような形で相対化して、そしてそれを組み直していくのかという、そういった問題提起の重要性ということをこの水俣病事件というのは強く物語っているということを言うてくださったというふうに理解しております。

例えば、原田先生の場合ですと医学の立場からですね、水俣病の病像とい

うのですか、よく言われる有機水銀中毒が原因となって生まれる症状、これを水俣病の病像としてとらえるというとりえ方ですが、おそらくこういう近代医学に特有の因果論に立ったとりえ方では、水俣病の病像というのはとらえきれないのだということを定義なさっていると理解しております。それから富樫先生の場合もですね、裁判の過程でチッソの過失責任を立証できるかどうか、これが非常に近代の法学的な観点で水俣病事件を集約的にとらえていると思うのですけれども。

ところで、そうではない、単なる公害事件としてもとらえきれない。非常に構造的な広がりを持っているのが水俣病事件だと。こういったところから、近代科学が戦後分化を遂げて多角化している方法論では、見えない事態を何とかとらえようとしている努力がここにあるのだというですね。ですから広く浅くでももちろんいいし、狭く深くでもない。そういう意味では違ったパラダイムをここで構成していくことが必要だろう。その出発点の水俣のこの事件であるという定義をなさっていると思うのですね。ですから私、別の所で、水俣というのは、特に地球環境の危機ということが懸念される中で、いきおい漢字の水俣ではなくて、広島長崎と同じようにカタカナで書かれそうになって、これはどうもおかしいと考えたのです。やはり漢字で水俣と書いて、水俣という地域そして地域の歴史が作り出した事件として、その構造的性を解明していくことが必要であって、それがそれほど新しい学問の体系を樹立していく重要な出発点の一つになっているというとりえ方を定義なさっているというふうに理解しております。

議論ができないのはとにかくやってみないことには、どうしようもなかろうという気がしますけれども、そここの辺についてのお二人の先生の考えを少し聞けたらと思います。

それとですね、今日このシンポジウムに予想を上回って報道各社来ていますけれども、私専門はメディア論ですけども、メディア論の立場からも、非常に多くの問題提起をしていると思うのですね。例えばどういうことかと言いますと、今まさに所沢のダイオキシン問題で、メディアのおおむねの論調は、

テレビ朝日たたきになっているわけです。それから行政の方も、ダイオキシンのある種の安全基準を急いでつくろうとしているのですが、例えば、水俣のこの事件の経過というものをきちっと認識していれば、議論はそういう問題ではないのだということです。少なくともジャーナリズムの方から提起されて然るべきなんですけど、それが一向に出てこない。そういう意味では水俣の問題というのは決してまだ十分に活かされていないし、学問的な問題提起にもつながっていないだろうというふうに理解しています。ですからせっかく取材していただきながら、辛口になるのですが、だいたい地域のマスコミは一体何をやっているのだということを提起するきっかけにもなればいいと思います。以上です。

<原田>

いやもうありがとうございます。よくまとめていただいたという感想です。

私がわりとよく使うのですけれども、水俣病は鏡みたいなものだと思っています。これに映してみるとですね、いろいろなものが見えているわけです。しかしそれは普通の鏡とは違って、見方によっては歪んでも丸くもどうでも見える、水俣病はそんな事件だと思っています。だからとにかくいろいろな分野、別にそれは研究というふうに限らなくていいので、一人ひとりの生き様みたいなのをそこに映したときに見えてくる、自分が見えてくる。そういうテーマだと思うのです。だから、「学」といっても研究者だけがやるっていうイメージでもないですよ。市民に開放して、というか素人も参加して、みんなで寄ってわいわいやりうやという感じが、私としては強いわけです。それは先刻の川本さんの話で分かるように、専門家と素人とは何かということです。だからあんまり言葉だけで「学学学」といくと、本当にガクガクっといくんじゃないかと思います。

<富樫>

私自身はもうちょっと「水俣学」をまじめに考えています。今たくさんあ

る学問分野や専門分野の一つとして水俣学を構築するのは、全然意味がないと思っていますよ。そうではなくて既存の学問の体系なり、あるいはスタイルというものに、一つのアンチテーゼとしてならば、水俣学という、問題提起にそれなりの意味があるのではないかなと思います。そうするためには一方では水俣病に関連するいろいろな多角的な研究を進めながら、他方でそれを大きな視点で総合化していくという、両方の作業が必要じゃないかというふうに思いますね。多くの課題はこれから取り組まなければいけないものだと思います。

貧しいながらも過去 40 年くらい、ある程度の研究の蓄積はありますので、それをもう一度検証しなおすという作業も重要なのではないかな。水俣病研究会の方は、この間発行しました『水俣病研究』という年報の第 2 号の研究会をもう始めています。第 2 号では水俣病医学の問題を特集しようと思っています。そういう場合にも、過去の検証はどうしても必要ですね。40 年間、かなり細分化されたいろいろな医学の分野の人たちがやってこられたことが一体何であったのか。

有機水銀説一つ取り上げてみても、1959 年 7 月に発表された当時、水俣を取り囲む当時の日本の政治社会状況に対してどのようなインパクトを与えたのか。そこにはもちろん官僚も出てくるし、チッソも出てくるし、漁民や患者も出てくるわけですが、そういう人たちがどういう事実上の受け止め方をして、どういうリアクションを引き起こしてきたのかというようなことをもう一度きちんと整理して検証してみる必要があると思うのですね。

今まではそういうことをやっている暇がなかった。認定・補償を求める患者達が沢山出てきて、特に原田先生なんか他に代えがたい貴重な医学者ですからあっちにもこっちにも引っぱり出されるという状態で走りつづけてきたと思うのです。それはある意味では研究者にとってはマイナスでもあって、じっくりものを考えるということがなかなか許されなかった状況だと思うんですね。最近ようやく落ち着いてものを考えられる状況になってきたように思うんです。

例えば過去 40 年の熊大の研究班を中心とした水俣病医学の歩みは、相当にドロドロしているものですから、教科書に書いてあるような内容ではとても収まらない、そういう複雑な経過をたどっています。そういうことはきちんと明らかにしておく必要があるし、なぜある時点でとんでもない方向に行っちゃったのかということもきちんとおさえておく必要があると思います。

そういうことを考えていくと、結局、単なる臨床や病理の問題にはとどまり得なくなってしまうですね。水俣病のどんな論点でもいい、一点突破式にたどっていくとですね、結局、日本の近代という鉅脈に否応なしにおつかるというのが私のイメージです。そういうものを横につなげていったものが、ある意味では「水俣学」ではないか、そしてこれが、いろいろな意味で、21 世紀に対しても重要なメッセージを含んでいるのではないかという予感がしています。

<羽江>

学としてのお話がが続いているのですが、聞いておりますと実は今私が飯を食わしてもらっている社会学というのは、近代 200 年の歴史とともに歩んできた若い学問です。創始者がコントだとかロバートオーエンだとかサン・シモンだとかご存じの名前をあげれば、一挙にでてきますが、その辺から社会学が始まってすでに 200 年経っているが、まだまだ他の学問に比べると、若い学問であるというふうに言われています。それが一つ。それからもう一つは、サン・シモンなりオーエンなり、あるいはコントが目指した、そして書き残したものは、社会学史をやっている人たちから総合社会学と名付けられているものです。総合社会学というのは実はいい言葉で表現すると、いろいろな花を生けた花瓶のようなもので、悪い言葉で罵倒すると、何でもかんでも捨てられているゴミ溜のような学問だと。こういう批判を初期の社会学に対して投げつけて、一つの個別科学としての社会学を構想するという歩みが進んでいるわけです。その結果として、それぞれ細分化されて、小さなところで蛸壺のような状態の研究しかないという状況にもなれないし、

研究者としての評価も受けない。こういう状態が今社会学でも作られております。

しかし、それに対して私は批判的なんです。社会学の始まり、例えばコントなんかをみましても、トータルに社会全体をつかまえようじゃないかと努力しているのです。ですから水俣は水俣としてトータルに把握したときにどうとらえられるのか、映ってくるのかと努力することに魅力を感じるのです。コント達にはフランス市民革命後の進歩と反動、そしてそれを突き抜けて社会主義を含む新しい社会変化の方向をトータルにつかまえようじゃないかという意図がはっきりしている。「進歩と反動」の時期を「和解」以前とするならば、「もやいなおし」と言われる現在は社会学を生み出した時期と重なるのではと思います。それが成功しているかはまた別ですけども。そういう、全体としてトータルに把握するという視点に立ったときに、私は水俣学と表現してもいいんじゃないかと積極的に思っております。

なお、個別の研究者あるいは日常生活を営んでいる市民といわれている人たちも、実はそれぞれの持ち場、そこで生きていかななくてはならないという場が与えられ、その場を無視しては、どうにもこうにもならない。そういう葛藤の中で全体を見回している。そういうものが水俣学を考えるときに反映するだろうなと思っております。ですから、水俣学を積極的に私は考えた場合、水俣学の歩むであろう道を、社会学が歩んできた歩みと重ねつつその見直しを考えております。

それからもう一つ、水俣学の構想で、私のはっきりさせたい点は、例えば最初の発言に、環境社会学あるいは環境学で、THINK GLOBAL、ACT LOCALと言われたわけですが、水俣学もまた現実から距離を置いたまま、実践とは無関係だと考えてはいけないということです。つまり個別細分化された具体的な問題を考えて、そこにある一定の解決あるいは解答を見出す、その場合においてもその個別的、具体的なものが、実は抽象的、一般的な次元の像を構成するかけがえのないものだと思うわけです。それは環境論や水俣学ということだけではなく、実は私たちが個別の問題を考えるときに、いつ

も全体を睨みながらというふうに教えられたことだということをちょっと付け加えたいと思います。

そういう意味で水俣の具体的な人々の生活と、あるいは患者さんと関わりながら個別に、原田先生のように、この患者さんにどうしたら治療できるのか、あるいは富樫先生のようにこういう訴訟に対してどういう法的な手段が講じられるかという場合も、やっぱり現在の日本の法制度なり、あるいは世界の法制度を睨みながら知恵がでてくるし、それを後ろからどんっと押してくれる力が、川本輝夫さんであったり浜元二徳さんであったりしたんじゃないかというふうに私は思っております。

<原田>

私が一つ言いたいのはですね、水俣学でも何でもいいのですが、やはり研究するということはある明確な目的があると思うのですよ。それは水俣の被害者のためにならないような研究はしない方がいいと私は思うわけです。学問にいろいろな立場があるというのはよく分かります。だけど医学というのは非常に単純です。なんのために医学を研究するか、それは患者のためにする。他に何のためというのはないわけです。だから水俣学というのは何のためにするかというと、それこそ被害者のためになるような学問でなければいけないというのは明確ではないかと思うのです。偏ってますかね。医学は中立だとか、科学は中立だとよく言われます。力関係が平等なときは中立があるかもしれないけれども、全然力関係が違うときにですね、中立ということはないわけです。もし水俣学というのがあって、それを研究する以上は、被害者の側に立つ、弱者の側に立つという明確な目的が必要だと思います。しかし、本当に被害者のためになるのかどうか、それははっきり分かりませんよね。なると思ってやったことがならなかったり、ならんと思ってやったことがなることもあり得るけれども、だけど最終的には被害者というか弱者のためと、目的はちゃんとしておかねいとおかしくなるんじゃないでしょうか。

「負の遺産」を伝える公害教育を

<会場>

私はちょうど研究者と現場の中途半端な立場ですけど、学園大学の非常勤講師をしております、田中です。

先ほど嵯峨先生のご質問の中にもありました、小林先生のお答えの中にもあったんですが。例えば二極対立の図でみていくと非常に狭くなってしまうというのは事実だと思いますけど。私はちょうど1960年の三池争議それから新日鉄の争議両方に関わりをもちましたものですから、よく現場でみております。確かに期末の闘争の局面に入りますとですね、非常に大雑把な言い方をしますと、二極対立ではなくて1対1対8、つまり1割は徹底的に組合員と、1割は会社の事務局と8割が後、重りのついたほうに準ずる。そういうわけで8割の争奪戦になるわけです。その8割の中に意外にいろいろな真実が含まれている。生活がかかっていたり、人権がかかっていたりするわけです。そういうものを細かく分析すると、やはり一つ見えてくるものがあるわけですね。それは理解できるのですが、最後に原田先生がおっしゃったように、それでいてなお貫かなければならない立場はあるのではないか。それが最後に残るのではないかという気がするわけです。

それは何なのかというのを考えたときに、一つの価値観を前提にせざるを得ない。そこで今度は羽江先生のお立場に質問が及ぶわけですけど、実は今、熊本県の教育委員会がどのような環境教育の副読本を出しているかご存じでしょうか、皆さん。実は、かつて水俣湾を埋め立てました県の公害部長が、その後、県の教育長になりまして、そのとき副読本が出ております。そしてその県の教育長はその後県の技術課長になりまして退職しております。その後の公害部長は今の副知事であります。そういう時に出来た県の公害教育の副読本を見ますとですね、水俣病のところには何て書いてあるかということ、そこに患者のことは何にも出て参りません。一つも出てないのです。ただプランクトンから植物連鎖で水銀が人体に入っていくことだけしか書いておりません。それで水俣病を語ったことになるだろうかということが一つ。それ

からそのコメントのところに、いたずらに企業のことだけでなく、中学生一人ひとりのことについても、責任についても考えよう。別に中学生が水俣病起こしたわけではないのにそう書いてあります。それから四日市の教育委員会の指導書類を見るともっと悪いそうです。四日市の教育委員会の指導書類を見ますと、悪い空気は吸わないことと書いてあるのです。それからできるだけ空気のきれいなところに行くべきだと書いてあります。

そういうふうな教育を見ていくと、結局最終的には患者を追いつめるような、あらゆる発言になっていくのではないかな。いわゆるニセ患者発言という形になっていくのではないかな。だからそこをきちんと正すためには、どうしてもある意味では、川本さんが哲学的なことを、さっきから臨床哲学という言葉が出てきているわけですけど、何らかの一つの解釈を鮮明にするという立場が必要になってくるのではないかと思います。そうしますと、例えばブラジルの環境会議で具体的に確認されましたように、世代間の平等という概念を引用しますならば、おそらくこの20世紀最大の負の遺産というのは、二つの世界大戦と水俣病に代表される環境公害問題だろうと思うのです。そうすると、その世代間の平等といえ、当然負の遺産を引き継がなければならぬ。この20世紀のおかしな負の遺産を引き継ぐためには、その教育というシステムを十分に議論しなくてはならないという気がするわけです。こういう会合だけではとてもその問題をいわゆる民衆規模に広げて、それを有効に活用することはできないと思うのです。

教育委員会では公害教育という言葉を変に嫌いで、環境としか言いませんね。そういう状態の中では、おそらくこのような差別の状態が、拡大、再生産されているだろう。現に私は熊大にも行っておりますが、そこの学生たちにアンケートをとってみますと、おそらく水俣出身の学生で、水俣病研究サークルの教育を受けてきた者もいるのではないかと思いますけれども、水俣については初めて聞いたとか、今までそんな深刻な話は聞いたことがないと答えるのです。だから、そこをもう少しきちんと整理していく、そしてそういう環境・公害の教育とか、あるいはそういうものをまとめる現代

史学だとか、そういうものを当然、水俣学の中に補助場としてでも入れていく必要があるのではないかという気がするわけです。そうすると、水俣学はどうであるかというよりも、それぞれの研究者なり市民みんなが、なすべきことをなす、その足跡が水俣学になっていくのではないかという気がします。ちょっとさっき羽江先生が環境教育は同和教育であるという、そういう水俣市での模索の話をされましたけど。あの同和教育ということも概念的でありますけども、それはどういうふうな解釈をしたらいいのでしょうか。

<羽江>

お話するときに一言付け加えたんですけど、グローバルに言えば、人権教育ということになるんでしょうけども、日本における人権教育というふうに引きつけてみると、実は同和教育なんですね。ですから私はそういう意味で同和教育と使っております。人権教育の一環としての同和教育という考え方はとっておりません。それは部落差別の問題に対する理解の仕方ということと違いがあるというふうに踏まえております。ですから国連人権教育の10年というものを受けて、国が作った国内行動計画、さらに熊本県で作っている県内行動計画というような場合も、同和教育を人権教育の一環というとらえ方をしているようなので、私は批判的です。

実は、市町村の段階にまで、国連人権教育の10年の行動計画を立てようという動きが出てきています。まだ一二ですけれども、出来上がっている、あるいは作ろうというようなところもあります。水俣で、水俣病教育というもの国連人権教育を受けた同和教育そのものとして位置付けるようなことになればなというふうに思いますし、そういう動きがあちこちであります。部落問題を非常に深刻な問題として抱えている市町村においては、部落問題を中心にした行動計画を立てるとかですね。ですから、そういう意味ではまだ希望を失っておりません。ただ、県の環境教育の副読本で、患者さんのことが一言もふれられていないということもお聞きしていますし、そのような副読本で、公害の問題を環境というふうに言い換えるというような、上にいけ

ばいくほど薄められているようです。

問題の核心につながるわけですけど、実は今おもしろいなと思っているのは、ローカルに、あるいは下に、なればなるほど具体的に問題をつかまえてそれに応えようと、自分たちの力でというような動きがありますので、そういうふうに私は水俣学の問題も考えたいと思っております。その関連では人権という視点から、もう少し私なりの参加の仕方もあろうかというふうに申し上げます。

<司会>

そろそろ予定の時間も過ぎたので、締めくくりをしたいと思います、最後にそれぞれ先生方にまとめていただきます。その前に、せっかく水俣から何人かみえていますので、お互いに議論はされ尽くしているのかもしれませんが、どなたか挑発的な議論でもいただいて、それを受けて3人の先生方にまとめていただくということにしたいと思うのですがいかがでしょうか。じゃあ加藤さんお願いします。

水俣学の中に精神医療の分野を

<会場>

水俣から来ました加藤といいます。特に水俣から来ている皆さんの中でというわけではなくて、個人的に発言させていただきます。というよりもお願いですね。

先ほど羽江先生のパネラー発言であった5点の市民意識調査ですね、この5点のご指摘は、私は水俣に10年住んでいるのですけれども、今も同じ中にあるということを痛切に感じております。患者さんとの関わりというよりも、私が一市民として水俣で様々な市民の方達と共にするときにいつも突き当たる問題です。だからこの5点の問題を本当に水俣の中で乗り越えられたときに、水俣病事件の真の教訓化というのがあるのだらうと常々思っております。そしてこの間、水俣の問いと可能性ということで、水俣学を構築してい

こうという試みには非常に期待しておりまして、特にその可能性というところで、何点か付け加えていただきたいと思いますのですが、実際には今回のこの会というのが熊本学園大学の社会福祉研究所が関わっておられるというところで、当然お考えになられると思いますけれども、やはり私は今生きている、今水俣にいる被害者の人たちにとって、特に今40代半ばにさしかかろうとしている胎児性および小児性の患者さん達が、地域で当たり前に生きていけるということが福祉であるというふうに、福祉の問題というのが水俣病事件の中であまり論議されてこなかったと思います。本当の区切りがついたときに、これから地域で生きていこうとする人たちにとってこそ、水俣病事件をきちっと踏まえた福祉をみんなで考えていって、それがやはり可能性から実現にむかっていかないと、50代60代になってからではもう遅いというふうに思っております。

やはり今40代にある方達が50代になったときに、地域で当たり前に生きていけるということが実現していて欲しいと思っております。そのためにぜひ力を貸していただきたいと思っております。

それからもう一点なんですけど、阪神大震災のあとに、突然肉親を失われた方たちにとって、すぐ精神医療の部分からのケアというのがありました。しかし水俣病事件はこれだけ大きな事件でありながら、あの裁判の後もそういう分野での動きというのは全くなかったと思います。特にあの時期に思春期であった方たちにとって、それはとても大きな、心の中にこれから自分はどう生きていくのかということを探し出すことの出来ない、とても大変なところにおられたと思います。そういう意味で、やはり水俣学の中にそうした精神医療の部分、カウンセリングなりセラピーなりその辺のところが具体的に出てきてほしいというふうに思っております。以上です。宜しくお願いします。

<司会>

ありがとうございました。まあ水俣学もいいけれども、課題は具体的に山

積んでいるぞということで、それをどうするのだという発言であったかと思いますがけれども、ここで、最後に順番を変えまして、羽江先生、富樫先生、原田先生という順番で、時間がありませんのでほんの少しずつまとめていただければと思います。

<羽江>

まとめるなんてできませんけれども、今の加藤さんのご発言には何も言うことないんですが、やっぱり今私が水俣というと、まずイメージが頭の中に浮かんでくるのは、お父さんが亡くなられた、つい最近川本さんよりちょっと前にお父さんが亡くなられた坂本しのぶさんの顔です。しのぶさんは、次にお母さんが亡くなられる。そうするとしのぶさんどうなるのだろう、どうするのだろうと思うし、写真家としてある意味では本当に実力をもっている半永一光くんの顔がぱっと浮かんでくる。そういう意味では私は水俣学であろうとなかろうと、ここに今日参加されてる方々に特に水俣のそういう患者さん、胎児性の患者さんと友達になってあげてほしい、なってくださいというお願いをまとめたいと思います。

今の言い方でしのぶさんや半永さんや患者の人たちが水俣病にかかって気の毒だ、同情すべき対象だと言ったかのように聞こえたら、それは誤解ですと申し上げます。それは私が一方でずっとかかわってきている部落問題をめぐってですけれども、私は被差別部落の人たちが長年にわたって差別し続けられてきたかわいそうな人たちだとは思っておりません。そして彼らの歴史を、差別された歴史だとも考えておりません。彼らの歴史は差別と闘い、差別を克服してきた歴史だと思っております。その意味では水俣病の患者さん、あるいはしのぶさんにしたって半永さんにしたって、私は水俣病に冒されたかわいそうな人だとはちっとも思っておりませんし、これまでの水俣病の患者さん達の歩みは、きちんと問題を提起し人権を確立するために困難な闘争をやり続け今に至った、つまり権力さえも環境という言葉で受け止めなければならなくなった、患者さんの立場からいえば、悔しくてたまらないけれど

も、国としてはあのような和解をせざるを得なかったという意味でも、私は単なる気の毒な被害者というイメージは持っておりません。

我々が人間としてのあり方を妨げられた時、どのように立ち向かっていかなければいけないか生き抜かなければならないかということを私たちに教えている仲間の一人だと彼らを思っております。

あとセラピーの問題などは原田先生がおられますので任せますけれども、そんな人間が原田先生の呼びかけで色々と集まって、初期の富樫先生たちが始めた、あるいは宮沢さんたちが一緒になってああでもないこうでもないといったあの水俣病研究会、ああいうものがもう少し大きく広がりをもった形で実現すれば、一つの総合学としての水俣学の可能性が私はないとは思いません。

<富樫>

今日は、「水俣学」というそれなりにかなり刺激的なテーマについて初めてシンポジウムに参加させていただいて、とても有意義だったと思います。先ほど、会場の皆さんから出ているご意見ご指摘は私自身も刺激になりましたし、今後いろいろ参考にさせていただきたいと思います。しかし、どうも今日のシンポジウムは最初から最後まで「水俣学」とは一体何だろうということで終始してしまったのではないかという印象をもちました。そしてそれに対する一番具体的な手がかりは、要するにこの30数年原田さんなり私なりがやってきたことを振り返ればそれが水俣学というものではなかったかというのが、たぶん一番具体的なヒントではないかと思います。それをもっときちんとした形でまとめてほしい、整理してほしいと言われると、今はその用意がないわけです。だから原田先生なり我々がやってきたことをどう対象化するかということが、あるいは水俣学としてのさしあたりの答えになるかもしれないと、そういう印象をもちました。

それと、これは30年いろいろな形で水俣病問題に関わってきた一人の人間としての感想でありますけれども、水俣の問題に取り組むことによって随分

と鍛えられてきたと思うのです。おそらく水俣病問題に出会わなければ現在の私はなかったと思いますし、こんなにタフになれたかなという気もしています。これは本当に気の長い問題ですので、別に水俣学についても1年で答えを出す必要はないと私は思います。そんな問題ではない、水俣病の問題は。原田先生がそうであるように、一生をかけてこつこつと強靱な精神をもって取り組むべきテーマだと私は思います。そういう意味では皆さんも、あまり性急な答えを我々に求めないでほしいと思います。

<原田>

何とまとめていいのか分からないのですけれども、たまたま川本さんが亡くなったということも非常に私は因縁めいた気がするのです。水俣学を私に教えてくれた、既存の学問の枠組みをこんなものじゃないかと言ってくれたのが川本さんだったろうと私は思います。水俣学という言葉がもしあるとするならば、従来の権威とか、専門家とか、専門領域とか、概念、そういうものから解放する学問だというふうに言ってもいいのではないかと思っております。それから最後に言われたように、川本さんが最後は福祉だと言っていました。だからそこにつなげていくように、目的はやはり誰のために何のためにするのかということが、片方では気色鮮明にしながらやっていきたい。あと何年やれるか分からないけれども、次の私のテーマは若い人と一緒にやることだと思っています。今日は若い人もみえているので今後期待したいと思っています。

<司会>

どうもありがとうございました。始まったばかりで結論はないのですが、なおこのテーマで手を変え品を変え役者を変え、続けていきたいと思っています。それでは今日は長時間にわたってありがとうございました。